

落の葉

小嶋孝三郎

落の葉ニぼんと穴明く暑哉

(文化十二年六月、「七番日記」)

この句の季題は「落」ではなく「暑さ」にあり、夏である。文政十二年版「一茶発句集上」にも、

落の葉にぼんと穴あく暑哉

とあり、別段辭句に變りはない。

一茶が何時、どんなところでこの句を詠んだものかはちょっと解らない。しかし、この句は、「七番日記」の文化十二年三月の部の後に、「六月の部」として二十九句(並びに俳諧歌一首)追加されている中の一句である。そこには、

竹縁の鳩ニ踏るゝあつさ哉

○落の葉ニぼんと穴明く暑哉

○稲の葉ニ願ひ通の暑哉

研究随想・落の葉

と結句いずれも「あつさ哉」の句を並べている。なお、この句には、次の句と並べて丸印が頭註されている。この個処で丸印がつけてあるのは二十九句中七句である。

2

ところでこの句の解釈であるが、川島つゆ

女史「一茶俳句新釈」によると、虫害のために落の葉に穴があいたのであろうとし、一般の作者なら落の葉に穴のあいているのを見ても暑苦しいといったような理屈に走った句になりがちなどころを、見た儘感じた儘にさらりと吐きかけている点をよしとしていられる。

即ち川島女史の説は虫害説であり、「ぼんと」を擬態語(擬容語)とみるのである。(伊藤正雄氏「小林一茶集」頭註も同じ。)

しかるに、勝峯晋風氏「一茶名句評釈」によると、

「暑さ凌ぎのいたづら半分、落の葉をもぎとつて掌にのせて、上からぼんと叩くと、それにぼんと応じて葉に大きな穴があく。それが又暑いと云ふので、暑さ凌ぎのいたづらが、却つてよけい暑さを感じさせるところに一茶の覗ひがある。」(一二〇頁)とし、「ぼんと」を擬音語(擬声語)とするのである。そして、

「ぼんと云ふ擬音に胸のすつきりする印象を受けさうで、これを暑いと誇張するのが一茶の個性である。落の葉がひとりでの蓮のやうに音をたてゝ穴があく例は知らない。」(同頁)

と云われる。要するに、勝峯氏の暑さ凌ぎのいたづら説は、「ぼんと」を擬音語と見たところにこのようなうがった面白い観方が生じたのであろう。

吾々は子供の頃、落に限らず朝顔の葉でも、それを掌の上に載せて勢いよく叩くと、ボン!とかパン!とかという快音を発した時の嬉しさは、今でも忘れられない。こうした遊びは農村に限らず都会にもある。しかし、勝峯氏のこのような解釈は、余りにもうがちすぎではなからうか。一茶の眼は、もっ

と別な何物かに向けられていたのではなからうか。

3

一茶には「露の葉」を詠んだ句は多いが、例えは、

露の葉に酒飯しるむ時雨哉

(文化七年、「七番日記」)

露の葉ニ煮べ配りて山桜

(文化十三年、")

露の葉にいわしを配る田植哉("、")

露の葉ニ煮べ配りて花の陰

(文政五年?「浅黄空」)

等を見ると、農村では露の葉を臨時に食器の代用として、丁度竹の皮と同じように使っていたことが解る。

してみると、こうした竹の皮代用の露の葉が何かの拍子にボンと穴があく事もあったろう。田植も済んだ頃だとそんな折にも暑さを感じたのもあろうか。しかし、これでは勝峯氏の擬音説と五十歩百歩である。

露の葉の用途は他にもあった。農家ではこれを紙の代用にした。勿論紙の代用といつても字を書くためなどではない。芋の葉など萎えるとすぐ破れるが、露はこれを日蔭で乾か

すと弾力が出来てその点厠の用に好適したとのこと。信越北陸では現今でもなお行なわれているらしい。

ところで、そうした露の葉が茎だけ食用に供された後、軒先に吊されたり縁側などに乾されたりする頃は、丁度漸く夏の暑さの厳しくなりはじめる時分だ。茎をむしり取ったあとの露の葉はさながらぼんと口があいたように見える。これも一つの解釈たり得よう。

4

昨年私は擬音語擬態語の研究から、一茶の全俳句を調査した。その際、「ぼんと」という語が一茶の二万余句の中で他に一度も使用されていないことが解ってがっかりした。ところが、その際、同じ「七番日記」の文化十二年四月の部に、

露の葉をかぶつて聞や時鳥

という句を見出して、これだ! と思ったのである。

露の葉の効用が此処では更に拡大されて日傘乃至日よけの帽子の代用になっている。露の葉の日傘というと、何か秋田露のような大ぶりなものを想像し、蛙か河童の戯画と結びつくが、一方、露の葉を頭にかぶるとい

と、いかにも農山村の風物にありそうな地方的野趣が濃く感じられる。

右の句の二三句前のところには、

春耕と松井逍遙し侍けるに云々

と詞書のある句が記載されているところを見ると、一茶がその頃、これら毛野や長沼の門人らと同行した吟も多かったであろう。長沼は千曲川の西岸で、一茶時代には善光寺街道にある町として、往還の人々でかなりうるわっていたと云われ、ここには一茶の門人が特に多かつたらしい。

文化十二年といえば、一茶は五十二にもなつてはじめて結婚した年の翌年に当る。「汚れ猫それさへ妻をもちにけり」と云つて、家とか妻とかいったような全く世俗的な欲望をどうしても断ち切れなかった一茶が、遂に積年の野望を達成した丁度一年目である。江戸帰りの俳諧師がまるで親子程も年の違ふ廿八の女性と結婚した。一時は奇異の眼をもって見られたであろうが、その後漸く彼の近郷における声望は高まりつつあった。そして、嘗ては「心から信濃の雪に降られけり」「古郷やよるもさはるも夜の花」と嘆いた頃の裏が来ていたようでもあった。

そうした多忙な日々を送っていた一茶が、街道筋の往還にしばしば見かけたのは、落の葉をちょっと頭にかぶって、臨時に日よけにしている人だった。一茶自身も時にはそんなことをやったのではないか。(今なら甲子園のスタンドなどで手にした風呂敷や新聞雑誌の類を頭にかぶせるあの風姿である。)それが前記「落の葉をかぶつて聞く」といった句にもうかがわれる。

5

私が思わずこれだ! と直感したのは、落の葉ニほんど穴あく暑哉
落の葉を被つてきくや時鳥

の二句が期せずして二重写しになり、一つのイメージとして映じたことをいう。勿論この偶然的映像をその儘は認し得るとは思わない。前記勝峯氏の説をはるかに上まわる臆説であるから敢えて固持するわけではない。

カンカン照りの夏の午後、頭に落の葉をかぶった人が又も通る。ふと見ると、その葉にはポツンと虫食いの穴があいていた、というのである。だがしかし、句として表現するのは、何もわざわざ頭にかぶった落の葉などと言う必要はない。それはこの地方の風俗とし

て、誰しもよく見かけているところだ。一茶はそうしたありふれた田園の夏の風物を、さりげなくさらりと詠んでいるのである。そこにこの句の味があり、それが又一方では種々の解釈を生じる所以でもあろうか。

一茶文学に漂う「土の臭い」——所謂農民性、農村的泥くささを嗅ぐことなくして、単に通り一べんの解釈を下したのでは、真に一茶を価値づけることは出来ないであらう。

註 島崎藤村の「夜明け前」の中に、落魄の主人公半蔵が袴をつけた村夫子然たる姿で、子供から貰った青い落の葉を頭にかぶって寺に出かけるところがある。この場合は、ちょっと信濃の風俗の例にはならないが、一つの参考として記しておく。

(三三・九・八)

「論究日本文学」第八号

——一九五八・四——

「赤光」についての疑問

国崎望久太郎

逍遙「細君」試論

和田繁二郎

心敬における思索的特質について

岡本彦一

西鶴の描写的特質(一)

——その並列描写と類型性について——

水田潤

信如と一葉

塚田満江

宝暦五年「双扇長柄松」の上演について

浅野達三

徳富蘆花の「黒潮」について

橋本二三男

書評秋庭太郎「日本新劇史」上

山田朗